

佐倉市 教育センターだより Vol.10

平成18年9月29日発行／佐倉市教育センター／TEL. 043 (486) 2400 <http://www.city.sakura.lg.jp/kyoikucenter/index.htm>

「佐倉学カリキュラム開発現地研修会」を終えて

本年度も佐倉学カリキュラム開発研修会を、小中学校教職員向けに実施しました。この研修会は、次のような視点から計画したものです。

- (1) 昨年度、市内小中学校の教職員に「訪れたことのある施設や場所」について調査しました。その結果訪れたという回答は、「国立歴史民俗博物館」は93.0%だったのですが、「順天堂記念館」が61.4%、「武家屋敷」が62.9%という結果になりました。佐倉ならではの教育を推進していくという視点からは、もう少し足を運んでほしいと願うところです。そのきっかけをつくりたいと考えました。
- (2) 上記施設が点在するエリアは、江戸時代から現代に至る学習素材の宝庫です。自校で使用する資料を収集する活動を通して、カリキュラム開発につなげたいと考えました。
- (3) 歴博は研究機関という側面を持っています。展示物を見るだけでなく、研究の成果を学び取ってほしいと考えました。また、この研修会は、参加者自ら計画を立てる部分を多くしましたが、その理由は、この学びのスタイルを児童生徒の学習指導に生かしてほしいと考えたからです。

佐倉市教育センター所長 大野 尊史

1 研修概要

本年度の「佐倉学カリキュラム開発現地研修会」は、市内各学校の佐倉学推進担当等43名の参加を得て、国立歴史民俗博物館の阿部義平教授、樋口雄彦助教授、研究支援推進員の渡辺明先生を講師に迎え、8月3日(木)に実施しました。

今回の研修会は、国立歴史民俗博物館の企画展示『佐倉連隊にみる戦争の時代』の展示物をもとに、佐倉のまちの歴史や変遷を理解するとともに、実際に現地調査を行うことで時代の変化を実感し、自校の「佐倉学」のカリキュラム開発に生かせるような資料を収集することを目的として実施しました。

国立歴史民俗博物館の研究支援推進員である渡辺先生のガイダンスを受けた後、企画展示室では阿部教授、樋口助教授から詳しい説明を受けながら、佐倉連隊に関する展示物の見学を行いました。

佐倉連隊について、歴史的遺構としての視点と戦争の時代をとらえるための視点の両面から、展示物を通して

理解することができたと考えます。

これまで佐倉といえば城下町というイメージが強かったと思われませんが、明治時代以降は軍隊を支えるまちとして、大きく移り変わっていったことを学んだ結果、研修会の参加者からは、実際に佐倉のまちに出て現地調査をした際に、佐倉のまちの見方がより深まり、幅広く資料の収集を行うことができたとの声がありました。

参加者が自ら計画を立てた現地調査では、佐倉連隊跡に関する調査、旧堀田邸や武家屋敷等の史跡の調査、佐倉の町並で時代の変換を経て現在も続く商店への聞き取り調査等、各学校で必要な資料の収集や、自校の「佐倉



【武家屋敷を調査している様子】

学」の取組と関連づけた、様々なテーマが計画され、テーマに沿って実際に佐倉のまちを巡りました。



【研修成果の報告の様子】

研修成果の報告では、現地調査の様子をデジタルカメラで撮影した画像を基に、自校の「佐倉学」カリキュラム開発に向けて

て収集した資料等について発表していただきました。

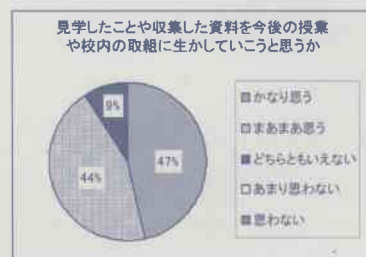
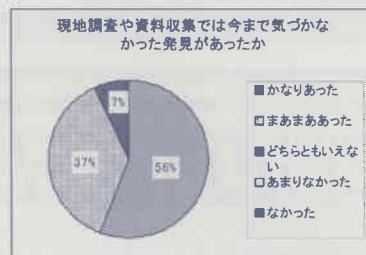
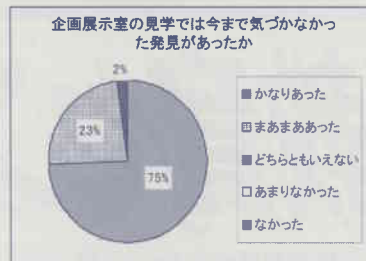
参加者自らが研修のテーマを考え現地調査に取り組むという問題解決型のスタイルで、自己決定の過程を重視した研修を行った結果、発表の際に学習の進め方についても次のように意欲的な意見が述べられました。

- ・遠足で城址公園に来たときに、ウォークラリーを取り入れながら、城址公園を佐倉連隊跡という新たな視点から歩かせることにより、史実の理解も深めさせられると考える。
- ・実際に自分が資料を収集したことにより、授業を行う際にも映像や画像資料に収集者の意図や願いを込めて伝えることができると思う。
- ・知識として教えるだけでなく、その背後にある人としてのものの見方や考え方にも触れさせたい。

講師の渡辺先生からは、「今後、佐倉学のように地域を生かした学習はさらに大事になるので、地域の物や人と関わることを重視した指導、子どもたちの興味・関心を伸ばす指導を心がけてほしい。」とのご指導がありました。

2 アンケートより

今回の研修で、企画展示室の見学で今まで気づかなかった発見が「かなりあった・まあまああった」との回答は、98%でした。一方、「あまりなかった」「なかった」との回答は0%でした。また、現地調査や資料収集では今まで気づかなかった発見が「かなりあった・まあまああった」との回答は93%でした。一方、「あまりなかった」「なかった」との回答は0%でした。さらに、見学したことや収集した資料を今後の授業や校内での取組に生かしていこうと「かなり思う・まあまあ思う」との回答は、91%でした。一方、「あまり思わない」「思わない」との回答は0%でした。



これらのことから、研修会に参加した先生方それぞれに、大きな成果があったと考えます。

研修会で見学したことや収集した資料を「佐倉学」の今後の授業や校内での取組にどのように生かせるか、ということについて参加者の感想の一部を紹介します。

- ・佐倉城を取り壊して佐倉連隊の兵舎が建てられたことを初めて知った。今も多くの碑や跡が残り、ここから多くの兵士が出征していったことがわかった。連隊と佐倉のまちが深く関わっていたことに触れ、戦争の時代について考えさせたい。
- ・武家屋敷は知識としては知っていたが、訪れたのは今日が初めてだった。実際に見て感じたことを今後の「佐倉学」の授業に生かしていきたい。
- ・佐倉のまちに出て店に飛び込んで話をするのは、これまで一歩踏み出すことができなかったが、実際にやってみただけで人の和を感じ、店の歴史的な背景なども聞くことができてよかった。この経験を子どもたちに伝えていきたい。
- ・生徒に地域への関心を持たせるために、今日の研修会のように、実際に見せる機会を増やせるようにしたい。

3 まとめ

今回の研修を通して、『佐倉のまち＝江戸時代』というこれまでの見方から、明治以降の戦争の時代との関わりという、より深い見方で佐倉のまちの歴史や変遷を理解することができたと考えます。これからも、地域素材の特色を生かして「佐倉学」のカリキュラムの構想を立て、授業に生かしていけるよう、指導する先生方自らが「佐倉」に対する理解をさらに深めてほしいです。

(西村 隆徳)

「佐倉学」に関するカリキュラム調査について

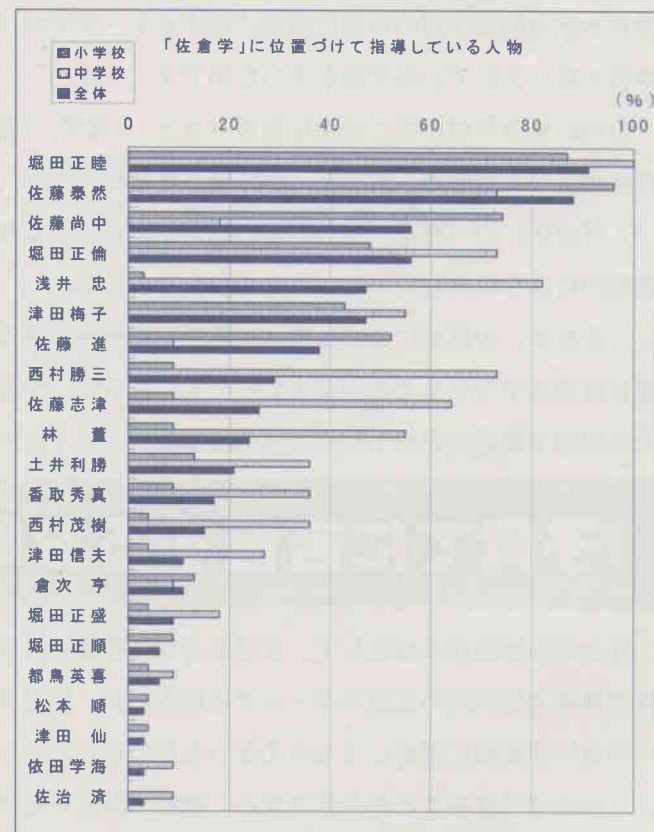
佐倉市内の各小・中学校における「佐倉学」実施の現状を把握するとともに、各学校における「佐倉学」指導の工夫改善を図るための資料とすることを目的として、「佐倉学」に関するカリキュラム調査を実施しました。調査結果の概要について報告します。

確実に指導計画に位置づけ、より多くの学校で積極的に取り扱っていくことが望めます。また、指導に必要と思われる教材の開発に取り組むなどして、「人物」を通して学ぶ「佐倉学」の質をさらに高めてほしいです。

問1 「佐倉学」についての年間指導計画を作成していますか。

調査の結果、市内全ての小・中学校で「佐倉学」についての年間指導計画が作成されていました。このことから、「佐倉学」は市内全小・中学校の教育課程に位置づけられ、計画的に指導されていることがわかります。

今後、「佐倉学」の更なる推進を図っていくためには、各教科等の年間指導計画を調整し、各教科等の指導と「佐倉学」との関連を一覧表に表したり、各教科等の横断的な関係を表す構造図を作成したりして、「佐倉学」の全体計画を立てていくことが望めます。



問2 「郷土の先覚者シリーズ」「ふるさと佐倉に星と輝いた人々」の中で、「佐倉学」に位置づけて指導している人物はだれですか。(複数回答可)

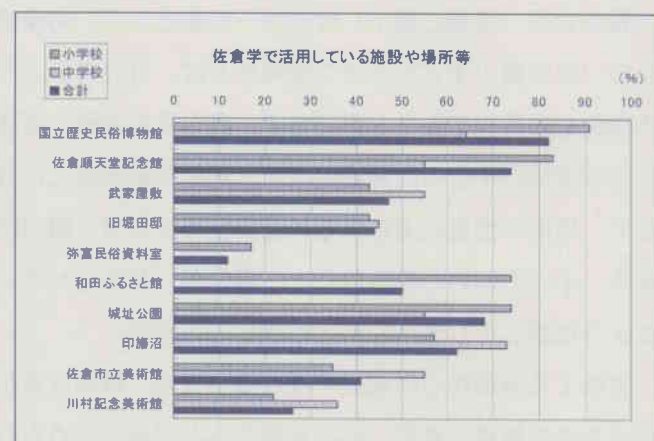
「郷土の先覚者シリーズ」及び「ふるさと佐倉に星と輝いた人々」に取り上げられている人物36名のうち、市内の小・中学校で「佐倉学」に位置づけて指導している人物は、堀田正睦、佐藤泰然ら22名でした。

佐倉藩主として藩政改革を推進し、幕府の老中首座として日本の開国にも大きな役割を果たした堀田正睦は、小学校の87%、中学校の100%で指導されています。また、「順天堂」を開き蘭学を志す門人に指導し、西洋の進んだ医学を用いて大勢の患者を救った佐藤泰然は、小学校の96%、中学校の73%で指導されています。郷土佐倉にゆかりの深い人物については、今後全校で「佐倉学」に位置づけて積極的に指導することが望めます。

教科等別にみると、小学校では読書の時間や社会、総合的な学習の時間など、中学校では総合的な学習の時間や社会、選択美術の時間など、いろいろな教科等で指導されています。

今後は、各学校において「郷土の先覚者シリーズ」を

問3 佐倉市内の施設や場所等で、「佐倉学」の指導に活用している施設や場所等はどこですか。(複数回答可)



※ 弥富文化財収蔵庫は弥富民俗資料室、和田ふるさと館 歴史民俗資料室は和田ふるさと館と表記

小学校の91%、中学校の64%が「国立歴史民俗博物館」を活用していると回答しており、市内の施設の中で

最も活用されています。小学校の場合、83%の学校が「佐倉順天堂記念館」を活用していると回答しています。これは、4年生の社会「きょう土につたわるねがい」の単元の学習で、佐藤泰然を取り上げて指導している学校が多いためです。一方、中学校の場合、73%の学校が「印旛沼」を活用していると回答しています。これは、理科や総合的な学習の時間に環境に関するテーマで調べ学習を取り入れている学校が多いためです。

市内の施設や場所等の活用状況をみると、「見学」「資料活用」「人材活用」のうち、小学校、中学校ともに、「人材活用」が「見学」や「資料活用」と比較してあまり積極的に取り組まれていないことがわかりました。

「佐倉学」の推進にあたっては、施設や場所をできる限り直接見学できることが望ましいです。さらに、学習上の問題や課題を児童生徒が主体的に解決していくため

に、「佐倉学」に関する専門的な知識や技能を持った専門家との連携を密にして、より積極的に「人材活用」を取り入れていくこいくことが重要だと考えます。

問4 地域の特色を生かした「佐倉学」の学習内容や教材等がありますか。

今回の調査では、それぞれの小・中学校で、地域の史跡、湧水や谷津田、印旛沼、祭りや伝説、佐倉囃子等の教育資源を基に地域の特色を生かした取組が行われていることがわかりました。教科等別にみると、小学校、中学校ともに総合的な学習の時間に最も多く取り組まれています。次いで、小学校では社会、生活、国語の順で、中学校では社会、理科、美術の順で取り組まれています。

今後も「佐倉学」の学びの質を高めていくために、地域の特色をさらに生かした指導計画を立てていくことが望まれます。
(西村 隆徳)

子育てに苦悩するお母さんへ ～教育電話相談室より～

連絡先 043-484-6611

社会の価値観が多様化して、子どもを育てる親も、家庭や地域で世代間の意識のギャップに悩んだり、子どもへの思いが周囲に理解してもらえないと思ひ込んだりして、悩みは尽きることはありません。電話相談室で受けている子どもの家庭教育に関する相談の大半が母親からであり、母親の多くは子育ての負担を重く感じて苦悩していると推察しています。

子育て中の母親の悩みに詳しい恵泉女学園大学の小日向雅美教授（発達心理学）は、『一般論として、幼稚園くらいの年齢の子どもを持つ母親たちは、自分の子どもの問題を客観視することができず、我が身の問題と錯覚してしまい、子どもの発達や友だち関係の悩みなどに対して、周囲の想像以上に深刻に受け止めてしまう傾向がある。子どもがいじめられると、自分がいじめられているように感じてしまう。』と指摘しています。

苦悩する母親からの相談を受ける中でも、母親自身が子どもを客観視できず、悩みを抱え込んで追い詰められてしまっていると感じることが多くあります。母親の身近に悩みを聴き支えてくれる人がいれば、早期解決の糸口を見つけることができると考えます。

電話相談室では、学校の先生に相談することを勧める

ことがあります。学校の先生に悩みを聴いてもらい受容されることで、自分の子どもを客観視することができるようになり、子どもを受容することの大切さに気づいてくれることもあるからです。

また、佐倉市教育センターで昨年度実施した道徳意識調査において、『地域の活動や行事に参加するなど地域との関わりを持っている子どもたちは、関わりを持たない子どもたちより道徳性が身についている』という結果が得られました。地域の教育力を生かし、小さな頃から親以外の人との関わりを持つということが、子どもたちの成長のために大切な力となると考えられます。



電話教育相談室には個室の相談室もあり、面接相談も行っています。悩みを独りで抱え込まないように、気軽に連絡を頂きたいと思います。なお、相談時間は午前10時から午後5時までですが、落ち着いた雰囲気の中でゆっくり面接相談ができるよう、時間にゆとりを持って来室していただければ幸いです。
(学校教育相談員 酒井 孝子)

科学技術教育に関する調査

1 調査を実施するにあたって

わが国は「科学技術創造立国」を目指しています。佐倉市としても、次の世代を担う小・中学生が科学技術に関心と理解を深めるとともに、夢と希望を傾け、志向を高めていくことが重要であると考えています。しかしながら、小・中学生だけでなく国民の「科学技術離れ」が指摘されおり、わが国の教育を考えるにあたって大きな問題となっています。そこで、その現状や実態を把握するために、市内小学校3校の児童と中学校2校の生徒を対象に、科学技術教育に関する調査を実施しました。

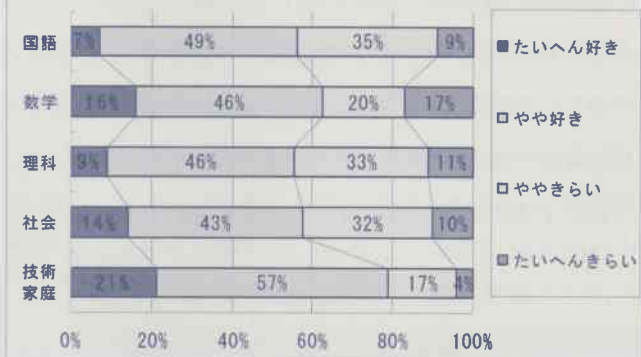
2 科学技術に対する興味関心

最近、小・中学生の「算数・数学、理科離れ」が指摘されています。そこで、佐倉市内小・中学生の「算数・数学ざらい」「理科ざらい」が進んでいるのかを調査しました。

グラフ1【小6】あなたは次の教科の学習が好きですか



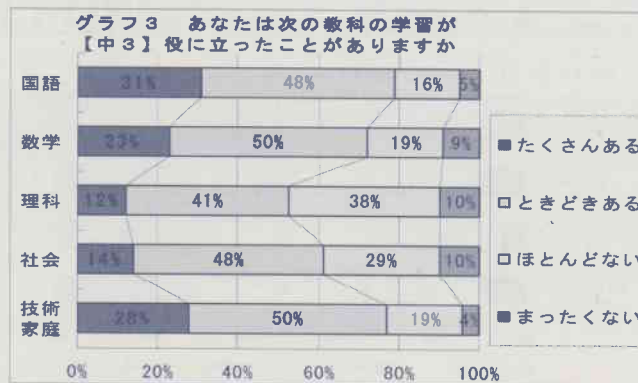
グラフ2【中3】あなたは次の教科の学習が好きですか



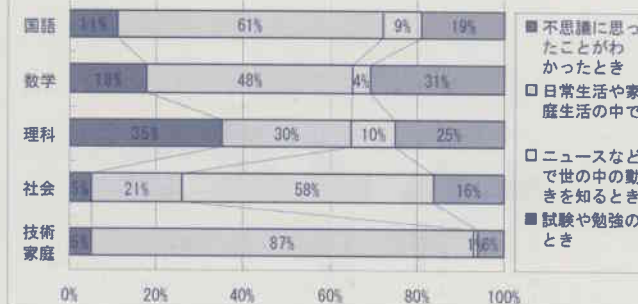
「たいへん好き」「やや好き」の合計ポイントを見ますと、小学校算数は71%、小学校理科は82%、中学校数学は63%、中学校理科は56%であります。【グラフ1・2より】

中央教育審議会で調査した全国規模の「義務教育に関する意識調査」を見ますと、小学校算数は55%、小学校理科は53%、中学校数学は37%、中学校理科は52%であり、佐倉市は全国平

均を上回っている傾向がみられます。しかし、中学校になると、数学や理科が「たいへん好き」と回答している割合が大幅に低下します。しかも、数学が「たいへんきらい」と回答している割合も高くなり、他教科と比較すると一番高いことについては大きな課題といえます。



グラフ4【中3】どんなときに役立つと思いましたか

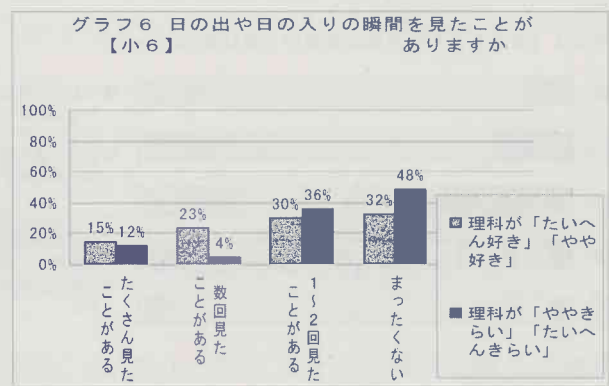
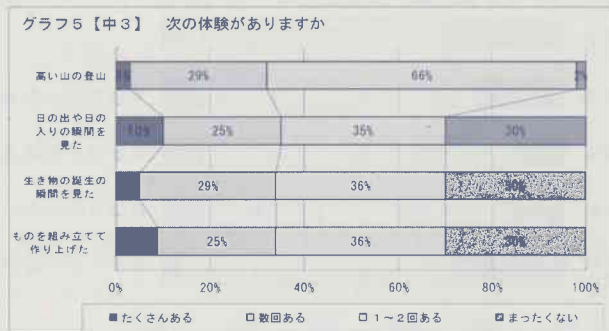


学習の興味関心は、その教科の学習が役立っているかどうかが大きく関わっていると考え、どんなとき役立つかを調査しました。役立つことが「たくさんある」「ときどきある」の合計ポイントを見ますと、小学校算数は90%、小学校理科は65%、中学校数学は73%、中学校理科は53%です。しかし、中学生になるとどの教科も「役立つことがたくさんある」と回答している生徒が大幅に減少し、「試験や勉強のとき」と回答する生徒が大幅に増加します。特に、数学においてその傾向が強く見られます。【グラフ3・4より】

3 体験活動の重要性

科学技術教育を進めるためには、子どもたちの自由な発想を大切に、体験的な学習を通して科学的なものの見方や考え方を身につけさせることが大切であります。そこで、施設見学や自然体験、ものづくり体験について調査しました。科学技術関

科学技術関係の施設見学について、「たくさんある」「数回ある」の合計ポイントは、小学生が64%、中学生が44%です。自然体験については、中学生で「日の出、日の入り」や「生き物の誕生の瞬間」をまったく見たことがない生徒が30%います。「たくさんある」と回答した生徒の割合は、どの項目も10%以下であり、予想外に自然体験は少ないことがわかります。ものづくり体験は、「材料からものを組み立て作り上げたことがあるか」という質問に対して、30%の中学生が「まったくない」と回答しています。【グラフ5より】



施設見学や自然体験、ものづくり体験の回数と算数・数学や理科の興味関心の関連性を調べてみますと、小学生は体験の回数が多いほど算数や理科に興味関心を示していますが、体験の回数が少ないほど算数や理科に関心を示していません。【グラフ6より】

中学生になると、体験の回数が必ずしも数学や理科の興味関心につながってはいませんが、体験が「まったくない」と回答

している生徒を見ますと、数学や理科に対して興味関心を持っていない傾向が見られます。

4 佐倉市における科学技術教育の推進のために

本調査をもとに、次の二点に留意して科学技術教育を進めていくことが必要であると考えました。

第一は、学校で行う授業の改善であります。今回の調査を通して、市内の児童生徒は算数・数学、理科、技術家庭の興味関心が高く、それぞれの教科を関連させながら学習に取り組んでいます。しかし、学年が上になるほど興味関心が薄れ、試験のための学習になりつつあります。各学校で授業を行うとき、ただ公式を暗記したり、実験結果を記憶したりするだけの学習では、科学のおもしろさはわかりません。これからは、今まで以上に、疑問を感じ、推論して確かめ、感動を覚えるような学習の過程を大切に、児童生徒が試行錯誤を繰り返しながら「発見する喜び」や「つくる喜び」などを体験できるような授業にすることが重要であります。また、年間指導計画の作成の際、教科間で学習を結びつけて指導できるよう改善していく必要があると考えます。

第二は、科学技術関係の興味関心を高めていくために、今まで以上に体験活動を重視することです。今回の調査から見ても、中学生の自然体験やものづくりの体験はとて少なく、小さい頃からの自然体験やものづくり体験が科学技術の興味関心に大きな影響を与えていることがわかります。そのためにも、学校の授業だけではなく、家庭においても自然体験やものづくり体験を小さい頃からは行うようにすることが大切です。また、公民館等の行政機関においては、今まで以上に体験型の学習講座設定に考慮するとともに、多くの子どもたちが参加するように、学校や保護者も呼びかけていくことが望まれます。

(沖永 寛)

編集後記

今回は「佐倉学に関するカリキュラム調査」を初め、市内の小・中学校にはお忙しい中、多数の調査にご協力いただき、ありがとうございました。さて、今年度、教育センターでは、昨年度の児童生徒を対象とした道徳意識調査にひきつづき、20歳以上の市民を対象に道徳意識調査を行っています。佐倉市民3000名に無作為抽出で調査用紙を送らせていただいたところ、1400通余りの返事をいただくことができました。中には「アンケート用紙を紛失してしまい、協力できず申し訳ない」といったお電話も多くいただき、佐倉市民の意識の高さがうかがえました。道徳教育に携わる者として、このような環境を大切にしたいものです。結果は次号でお伝えします。お楽しみに。(前林 典子)